

アリス・テンブルの幼稚園教育思想 — アメリカ進歩主義教育期における幼小接続カリキュラム開発の試み —

山本孝司*

要旨：本稿で取り上げるアリス・テンブル (Alice Temple, 1871-1946) は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのアメリカ幼稚園運動の末期を牽引した人物である。彼女は、シカゴ大学を拠点に幼稚園教育の実践および教員養成に関わった。そこで、彼女は、デューイの実践理論の影響を受け、幼稚園カリキュラムの内容が幼児たちの生活経験から引き出され、幼児たちに合わせて開発されるべきであることを主張した。

本稿では、アリス・テンブルの教育理論および実践の解明を目的としつつ、彼女がシカゴ大学において実践家として取り組んだ幼小接続カリキュラムの開発に焦点を当て、進歩主義教育期における幼稚園カリキュラムと小学校カリキュラム接続の原理について、カリキュラムの範囲と系統性という観点から明らかにした。

キーワード：アリス・テンブル、アメリカ幼稚園運動、幼稚園カリキュラム、幼小接続教育、国際幼稚園連盟

はじめに—問題の所在

1840年にドイツにおいてフレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852) によって創設された幼稚園は、1850年代にアメリカに導入され、19世紀後半を通じてアメリカ全土に展開した。こうした流れについては、いわゆる「アメリカ幼稚園運動」(the kindergarten movement in America) として知られている。アメリカに導入された初期の幼稚園は、当地に移民として渡ってきたドイツ人子弟を対象とするドイツ語幼稚園であったが、1860年代以降は、アメリカ人子弟を対象とする英語幼稚園が登場し、この種の幼稚園が主流となっていった。幼稚園がアメリカに定着するまでに、ドイツでフレーベルから直接間接に教えを受けた幼稚園教育実践家たちが渡米し幼稚園教員養成を行ったこともあり、アメリカの幼稚園を主導した教育原理はフレーベル思想であり、1880年代までフレーベル主義がアメリカの幼稚園文化を支配していた。1890年以降、幼稚園教育界においてこうしたフレーベル主義に対する批判が起り、幼稚園教師のフレーベル主義を固守する保守派と児童研究運動や新心理学を背景とする進歩派の対立が深まったことは周知されている。このようなアメリカ幼稚園運動の流れにおける保守派

と進歩派の対立に関しては、これまで先行研究においては前者をブラウ (Susan Elizabeth Blow, 1843-1916)、後者をヒル (Patty Smith Hill, 1868-1946) に代表させる形の論争史として描くのが定番とされてきた¹⁾。

本稿で取り上げるアリス・テンブル (Alice Temple, 1871-1946) は、ヒルと同じくアメリカ幼稚園運動の末期を牽引した人物である。彼女が幼稚園教育の指導に当たった時期は、ホール (Granville Stanley Hall, 1844-1924) の児童研究運動とソーンダイク (Edward L. Thorndike, 1874-1949) の新心理学の影響下で、フレーベル主義から進歩主義への幼稚園教育の転換期であった。彼女の功績は、同時代の同世代であった、同じくアメリカ幼稚園教育運動末期の指導者であるヒルほどにはアメリカ幼稚園教育史の中でも知られていない²⁾。

進歩派の代表と目されるヒルが、「コンダクト・カリキュラム」(Conduct Curriculum) において、幼稚園と小学校初級学年を視野に入れながらも、それぞれの年齢段階の「望ましい反応」(desirable change) につながる「習慣目録」(Tentative Inventory of Habits) の提示に主眼を置いて、ソーンダイクの新心理学の「社会的適応」観を根拠にカ

* 岡山県立大学 保健福祉学部

〒719-1197 岡山県総社市窪木111

リキュラム開発を行ったことについては先行研究でも明らかにされている³⁾。それに対し、テンブルが、デューイ (John Dewey, 1859-1952) のシカゴ大学附属実験室学校において、幼稚園と小学校を接続するカリキュラムをスコープ (範囲) とシーケンス (系統性) の観点から開発に努めたことについてはこれまでの研究で明らかにされてこなかった。

テンブルは、ヒルがコロンビア大学を拠点にしていたのに対し、シカゴ大学を拠点に幼稚園教育の実践および教員養成に関わった。そこで、彼女は、デューイの実践理論を継承し発展させることに尽力した。彼女は、幼稚園カリキュラムの内容が幼児たちの生活経験から引き出され、幼児たちに合わせて開発されるべきであることを主張した。その背景には、人間の成長と発達に連続的であり、同じ基本原則がすべての年齢レベルの学習に適用可能であるとの彼女の信念があり、彼女は幼稚園の原則を、一方で小学校低学年まで上昇的に拡張させ、他方で小学校低学年の原則を幼稚園まで下降的に拡張させるよう努めた。

本稿では、アリス・テンブルの教育理論および実践の解明を目的としつつ、彼女がシカゴ大学において実践家として取り組んだ幼小接続カリキュラムの開発に焦点を当て、進歩主義教育期における幼稚園カリキュラムと小学校カリキュラム接続の原理について、カリキュラムの範囲と系統性という観点から究明することを試みる。

1 アメリカ幼稚園運動におけるテンブルの位置づけ

(1) アリス・テンブルの個人史概略

「はじめに」で触れたように、アリス・テンブルは、アメリカ教育史研究の中ではあまり知られていない人物であり、アメリカ幼稚園運動に限ってもマイナーな存在として扱われている。ここでは、先行研究のなかでの比較的テンブルに紙幅を割いているスナイダーの『幼児教育における勇敢な女性 1856-1931』(Dauntless Women in Childhood Education, 1856-1931) を頼りに、少しくテンブルの個人史について触れておきたい⁴⁾。

テンブルは、シカゴ出身で、シカゴ大学を退職するまで当地で活躍している。彼女は、シカゴ無償幼稚園協会トレーニングスクールで進歩的な幼稚園教育の先駆者であるアンナ・ブライアン (Anna E. Bryan, 1858-1901) から専門的な訓練を受けた後に

幼稚園教師となり、数年の実践経験の後、ブライアンの後任としてシカゴ無償幼稚園協会トレーニングスクール校長を引き継いだ。テンブルの幼稚園教師時代は、デューイがシカゴ大学附属実験室学校で教育実践を行っていた時期と重なっていた。

1904年にテンブルは、シカゴ大学で学ぶためにシカゴ無償幼稚園協会トレーニングスクールを辞職した。彼女はデューイの講義を受けることで、自身が行っていた伝統的教材や方法の批判的検討に、彼の思想から大いに影響を受けた。

1909年、彼女はシカゴ大学を出て幼稚園で再び教員を務めた後、シカゴ大学幼稚園教育学部の学部長に就任している。在職中にテンブルは、幼稚園と小学校第1学年の部門を開発することに取り組む。そしてこの取り組みは1913年までには形になったが、この幼小接続の取り組みはアメリカ初の試みであった。これにより、幼稚園教員養成課程の3年(後に4年)のコースが始まり、幼稚園教員養成課程の学生に学士号取得が可能となった。さらに現職教師と監督者を訓練するための教育研究のための大学院が準備された。

1919年には、テンブルは、インディアナ州リッチモンドの幼稚園の調査を依頼され、その調査報告は、シカゴ大学出版局から公刊された。その後、幼小接続カリキュラムに関するパーカーとテンブルの著書『幼稚園と一年生の統一教育』が1925年に出版された。その間1900年頃に、彼女は国際幼稚園連盟に加入し、委員、委員長、副会長(1911-1913)、会長(1925-1927)を歴任し、幼稚園教育実践の第一線を退いて後も連盟機関誌への寄稿等で貢献した。

晩年にテンブル自身が語っているところによると、彼女の職業生活にもっとも強く影響したのは上にあがっているブライアンとデューイの二人である。前者に関しては、幼稚園教育における形骸化したフレール主義に対して初めて批判の声をあげた「開拓者」的な実践家気質に影響を受けた。後者に関しては、シカゴ無償幼稚園協会トレーニングスクールでの指導者としての実践とシカゴ大学の学生としての学修の10年の期間に、テンブルはデューイと師弟関係であると同時に専門職者同士の関係にあった。1909年にテンブルがシカゴ大学幼稚園教育学部長になる前に、デューイはシカゴを離れてコロンビア大学に移籍したが、大学に職を得て以降1932

年にシカゴ大学を退職するまで、大学はテンプレの実践の本拠地となった。彼女は、デューイの影響から、大学と附属実験室学校との間の教育研究の連携と幼稚園と小学校との間の接続カリキュラムの開発に専心することになった。

(2) アメリカ幼稚園運動におけるテンプレの功績

アメリカにおける幼稚園の普及にともない、教育界の中での幼稚園教師の勢力も拡大した。その顕著な現れとして、1885年に全米教育協会(National Education Association)の中に幼稚園部が設置されたことであり、1892年に同協会第32年次大会において国際幼稚園連盟(International Kindergarten Union)が結成されたことである。1890年代から1920年代にかけてのアメリカ幼稚園運動は、この国際幼稚園連盟によって主導される。

国際幼稚園連盟の活動の中でアリス・テンプレと特に関連が深いのが、「幼稚園カリキュラム」(Kindergarten Curriculum)である。同カリキュラムは、1919年にテンプレを委員長とするカリキュラム小委員会の中で作成された⁵⁾。小委員会では、標準的なカリキュラムを作成することによって、幼稚園教育の目的、内容および方法を明確化することが企図された。「幼稚園カリキュラム」の序文において、「幼稚園の学習の範囲・目的・方法が、幼稚園の採用されている所ではどこでも明確に与えられたなら、その学習がよりよいものになるであろうことは疑いない。そうした点についての明確な記述は、とりわけ専門の指導主事を置けない地域の何百人もの幼稚園教師にとってきわめて重要なものとなるであろう」⁶⁾と述べられているように、幼稚園教師にとっての教育活動を具体的に示すことによって、幼稚園における教育活動全体の質的向上が期待されていた。

このカリキュラムでは、科学的な方法による幼児研究による幼児の興味に関する研究成果に基づき、発達段階に従って適切な発達課題に沿った教育内容の再編が試みられた。具体的な教育内容は、「地域社会の生活と自然学習」「手工活動」「芸術」「言語」「文学」「遊びとゲーム」「音楽」の七領域に分類され、それぞれの領域で、目的、教材、方法、学習活動の系統性、学びの成果が示された⁷⁾。ここでの教育内容は、すべてを通じて、4歳から6歳までの子どもの諸要求に適い、この年齢集団に共通する経験か

ら構成されており、教育方法に関しては、こうした経験を促すための教師による環境構成に主眼が置かれていた。シカゴ大学の実験室学校における実践を基に、このプログラムは、家庭から出発して外に向かって移動し、季節の変化や休日の重要性を認識する活動を中心として計画立てられていた。

さらに次の記述からもわかるように、このカリキュラムの標準化は、小学校との接続が意識されていた。すなわち、「それは、まだ幼稚園を知らない小学校教師に幼稚園について説明し、彼らの学習活動に対して幼稚園が与えている基礎を示すことになるだろう。またそうした記述は、教育長や校長に幼稚園を評価するための原則を示し、幼稚園の学習が後に続く学校での学習とどのように調整されるべきかを示唆できるようにしてくれるであろう」⁸⁾と。この「幼稚園カリキュラム」作成と同年、テンプレはインディアナ州リッチモンドの幼稚園の調査を依頼され、その報告をシカゴ大学出版局から小冊子の形で公表した。その報告の中でテンプレは、幼稚園児が手仕事で先生の助けに依存するとともに、彼らが作業よりも話したり遊んだりする傾向があること、対する一年生児童たちはより活発な遊びが必要であることを指摘した上で、双方の子どもの特性を踏まえた幼稚園と小学校のカリキュラム上の接続とその運用に関する幼稚園教師と小学校教師の共通した研修の必要性を説いている⁹⁾。この彼女の報告書を受け、国際幼稚園連盟において1922年に、標準カリキュラムの発展型として、「幼稚園と初級カリキュラム」(The Kindergarten Primary Curriculum)が示され、4歳から8歳までの幼年期に一貫したカリキュラムを構成すべく、幼稚園と小学校初級学年とを接続する標準カリキュラムが作成されることになるが、その基となるのが、次節で考察する、シカゴ大学附属実験室学校におけるテンプレの教育研究であった。

カリキュラム開発の他、幼稚園教員養成に関するテンプレの功績としては、シカゴ大学ティーチャーズ・カレッジにおいて幼稚園教員養成の学課と小学校初級学年(1, 2年)のための教員養成の学課の統一を図ったことである。幼稚園と小学校初級学年教員養成は、2カ年課程と4カ年課程があり、後者の課程修了者に学士学位取得を可能にしたのもテンプレである¹⁰⁾。

2 テンプルの幼小接続カリキュラム

(1) アメリカにおける幼小接続の流れ

幼稚園と小学校の接続は、制度においては1873年のセントルイスにおけるハリス (William Torrey Harris, 1835-1909) とブロウによる公立学校幼稚園の設立に始まるが、カリキュラムにおいては1890年に至るまで未着手であった。カリキュラムにおける接続を後押ししたのは、前述したように、1890年代に教育界に影響をもつことになるホルの児童研究運動とソーンダイクの新心理学であった。前出の国際幼稚園連盟のメンバーのうち進歩派はこの児童研究運動と新心理学の成果を積極的に幼稚園教育の理論と実践に取り入れたが、その中でもテンブルとヒルは代表格であった。当時の進歩派の幼稚園教師たちは、子どもの個別な心理的発達に着目し、保守派によるフレーベル主義に基づく理論と実践を批判したのであるが、テンブルはデューイとの関わりの中で、子どもの成長発達の持つ心理的要因のみならず、社会的要因にも着目していた。

1899年2月6日、シカゴ大学の教育哲学のコースで、デューイは次のような発言をしていた。「最初の断絶は幼稚園と小学校の間にある。歴史的に見て、このことを説明するのは簡単である。幼稚園は、小学校がかなり明確な形で制度化されてから誕生した。フレーベルによって始められた幼稚園運動は、子どもとその教育に関する彼の独特な概念に基づいており、それは当初教育機関の一部ではなかった。幼稚園は、自主的な機関、慈善活動、慈善団体を通して、そして私立学校として続けられていた。その結果、幼稚園は孤立し、それ自体が独特のものになった。幼稚園が単に教育システムの一部であるか、またはその一部であるべきであるということは、多くの人々にとって新しい考えである。幼稚園の側では、幼稚園を特別のものとして見、幼稚園の子どもを小学生とは異なるものとして見ており、幼稚園が小学校とは異なる方法で扱われるべきだと考える習慣がある」¹¹⁾。このデューイの発言は、フレーベル主義の幼稚園教師の当時の状況をよく表現し得ている。当時の幼稚園教師 (とりわけ国際幼稚園連盟のフレーベル保守派) には、幼稚園が小学校の一部になると、幼稚園の独自性が失われるのではないかと危惧があった¹²⁾。

実際に小学校教育からの影響が幼稚園教育に及び、幼稚園に当時の小学校カリキュラムを構成して

いた3R'Sの訓練が取り入れられた。デューイはこうした幼稚園教育の変化については肯定的に捉えていた。「5歳9ヶ月で幼稚園を出て、休みを挟んで6歳で小学校に通う子どもは、自分を取り巻く二つの環境で見出される、全く革命的な変化を受け入れることができない。その結果、幼稚園は大量の無駄と摩擦を生み出している。……幼稚園のカリキュラムの各段階では、活動と表現の追加の形式として読み書きを使用して、私たちの最高の小学校のカリキュラムに対応するものを見つけ出す。したがって、幼稚園と小学校に共通する各科目や活動の種類での作業は、継続性が確保されるように配置する必要がある……。ある時点で、ほぼ5歳から7歳の間のどこかで、子どもは自分の名前を書き、自分の見た印刷物や書物のいくつかを解釈することに熱心である。彼は読み書きをする。このことは、彼にとって年長者たちがとても面白くて重要だと思う活動である。この時が来ると、教師は、クラスが幼稚園または1年生として設計されているかどうかにかかわらず、最もよく知られている方法に従ってこれらの科目を教える準備をする必要がある」¹³⁾。

他方で、幼稚園の教育内容および指導原理も小学校教育に影響を及ぼした。とりわけ1890年から1900年の間に、幼稚園に特徴的な教育内容であった図画、音楽、手工、体育、自然学習が小学校のカリキュラムに導入され、教育内容の面で小学校の「幼稚園化」が図られた。この時期から、小学校教員による幼稚園教育の参観も行われるようになり、幼稚園教師の指導原理や子どもに対する態度も小学校教師の教育方法に影響を与えた¹⁴⁾。

このような幼稚園と小学校の相互影響関係が下地となって、1910年代から1920年代にかけての「幼稚園カリキュラム」の作成および幼稚園・小学校接続カリキュラム開発が展開されることになった。

(2) 幼稚園と小学校第1学年の統一カリキュラム —幼小接続のスコープとシーケンス

1909年にテンブルがシカゴ大学に着任したとき、デューイの影響を受けた教師たちが彼の教育的信念を継承して教育と研究に従事していた。デューイの設立した実験室学校が、幼児期と児童期の子どもの成長を連続的に捉えるカリキュラムの理論構築のための不可欠な材料をテンブルに提供してくれた。彼女は、シカゴ大学在職中に、先述した「幼稚園プロ

グラム」作成を国際幼稚園連盟小委員会で行い、それに基づき幼稚園教員養成課程の指導者として後進の育成に当たった。

テンプルによる幼稚園教育に関する理論と実践の統合の試みが具体的な形で残されているのが、彼女と16年間シカゴ大学で同勤であったパーカー(Samuel Chester Parker, 1880-1924)との共著『幼稚園と第1学年の統一教育』(Unified Kindergarten and First-Grade Teaching)である¹⁵⁾。

この書の第1章の冒頭には、「この書の主な目的は、将来の幼稚園と一年生の教師が幼稚園と小学校第1学年の生徒の活動を緊密に調整する教授法を理解し、使用するための一助となることである。また、経験豊富な教師、学校長、および監督者がこれらの学年での教育を統合する可能性を理解するのを支援することも目的としている」¹⁶⁾と記され、テンプルらによる幼小統一カリキュラムの構築とその教授法の考案についての試みが示唆されている。

テンプルらは、この試みの前提となる予備的考察として、幼稚園と小学校第1学年に関し歴史的概観を行っている。「昔ながらの1年生」「孤立した幼稚園」「幼稚園と第1学年の統一」という区分けで、前二者を克服対象とし、三番目の「幼稚園と第1学年の統一」を理想形として位置づけている。

接続にあたっては、幼稚園と小学校第1学年の子どもに精神発達の重なりがあることを前提として¹⁷⁾、幼稚園の活動の小学校第1学年への上昇的拡張と、小学校第1学年の活動の幼稚園への下降的拡張の両方向でカリキュラムを構想した。それぞれの独自性を維持しながらの双方からの接続という発想自体は、今日のわが国においても、幼稚園の側における「アプローチ・カリキュラム」、小学校1年生に

おける「スタート・カリキュラム」という接続期カリキュラムの考え方として引き継がれている。

このような接続期の教育内容は、「基本的な社会的スキル」(Essential social skills)、「レクリエーション活動」(Recreational activities)、「社会生活の研究」(Studies of social life)、「健康に関する活動」(Health activities)、「市民道徳の理想と習慣」(Civic-moral ideal and habits)の五つの領域に分けられて、それぞれ領域ごとに具体的な活動内容が示されていた¹⁸⁾。

このようなカリキュラムの内容の選択と管理に関する原理としては、重要で明確な社会的要求(social needs)に基づいてカリキュラムを構築すること、カリキュラムを子どもの成熟度に適合させること、相対的な価値が最も高いトピックと活動を選択することの3点が重視され、社会的要求には、「歴史」、「コミュニティ」によって異なるものの、子どもたちの将来の市民的道徳涵養が一つの軸となり、発達に関わる子どもの「生理的条件」が今一つの軸となると説明されている¹⁹⁾。

特に内容の配列に関しては、子どもの学習能力への適用、本能的な興味の活用、重要な思考単位による「社会生活の研究」の組織、各スキルに関連した子どもの精神発達に応じた習得の整理、「社会生活の研究」と各スキルの頻繁な関連づけという観点から系統化された。『幼稚園と小学校第1学年の統一教育』の中では、次のように接続期の具体的な系統性が示されている²⁰⁾。

実験室学校での具体的実践内容が示された『幼稚園と小学校第1学年の統一教育』の第二部「学習の種類」(Types of Learning)では、上に示された領域の内容が混ざり合っていることが確認できる²¹⁾。

表1 シカゴ大学附属実験学校の幼稚園と小学校第1学年の統一カリキュラムにおける領域と内容

領域	具体的な内容
基本的な社会的スキル	言語表現、読書、算数、書写、綴り方
レクリエーション活動	歌、演劇、ゲーム、読み聞かせ、自然や芸術の研究
社会生活の研究	家庭や地域社会から都市や国の生活にかかわる社会生活の理解
健康に関する活動	栄養や食品の価値
市民道徳の理想と習慣	礼儀、自制心、機敏さ等社会的に有用な習慣

(出典 ; S. C. Parker & A. Temple(1925), Unified Kindergarten and First-Grade Teaching, pp.46-50 をもとに筆者作成)

幼稚園の子どもたちは、遊びの中で家を作り「家庭における家族の生活」(Life of the family in home) についてロールプレイを行い、その後、「コミュニティにおける生活」(Life in the community) として

家事から近所に視点を拡大し、店や教会、消防署を作り、個々の子どもの生活経験に基づき、同じく遊びを通して、社会に参与し、「家庭とコミュニティにおける必要な仕事」(Necessary work in home and

表2 シカゴ大学附属実験室学校の幼稚園と小学校第1学年接続期における学習内容の系統性

幼稚園	10月 ～ 12月	1. 家庭における家族の生活 a.寝たり食べたり社会生活をするための家庭における家具の配置、b.必要な作業：家を綺麗に保ち秩序づけること。衣類のお手入れ、食事の準備と提供 2. 食料の源 a. 食品を購入できる市場、b. 果物、野菜、穀物、卵、牛乳が生産される庭と農場 3. 季節の活動と収穫 a. 冬のための食料の保存、b. 冬の開花のために球根の植え付け、c. 装飾への使用のために紅葉、ベリー、種子の収集、d. 教室での動物の世話(金魚)、e. ハロウィーンを祝う、f. 感謝祭の準備、g. クリスマスの準備
	1月 ～ 3月	1. コミュニティにおける生活 a. 様々な家族のための家：家、アパート、ホテル、b. 家族のニーズに応える様々なお店やお店、c. 学校、教会、消防署、ガレージ、鉄道駅、およびそれらのコミュニティにおけるサービス、d. コミュニティ生活の必需品としての街路、散歩道、街灯、交通標識、交通手段、警察サービス等 2. 季節の活動と収穫 a.冬の外遊び、b.夏季と比較した冬季の日の長さの観察、c. 聖バレンタインの日を祝う、d.教室の植物の世話
	4月 ～ 6月	1. 家庭とコミュニティにおける必要な仕事 a.春夏の衣類の準備、b.家の掃除、c.庭の手入れ 2. 季節の活動と収穫 a.コマ、ビー玉、凧を使った外遊び、b.季節の移り変わりを観察して楽しむための遠足、c.養鶏、d.イースターとメイデーを祝う、e.学校の春祭りへの参加
第1学年	10月 ～ 12月	1. 顔合わせ；幼稚園の教室と第1学年の教室の比較。ここで行うこと：必要なものを作る、植物や動物の世話をする、部屋を整頓する、物語を語る、ゲームをする、歌う、読むことを学ぶなど。 2. 農園での生活 a.農家の家と家族、b.農家の仕事、とりわけ果物、野菜そして穀物の収穫と家畜の世話、c.製粉業者とパン屋の仕事 3. 季節の活動 a.校庭で集めた生産物を集めて使う、b.種を集めて春の植え付けのために保存する、c.秋の葉っぱ、ベリー等を集め、教室の装飾に使う、d. 屋内および庭に球根を植える、e.感謝祭とクリスマスを祝う
	1月 ～ 3月	1. 都市と町で農作物を売る a.町にワゴンで送る、b.町に列車と船で送る、c. 市内での農産物の保管と流通：ドック、貨物輸送、小売市場への輸送 2. 大都市とは対照的な田舎町：庭のある家、学校、教会、郵便局、鉄道駅、雑貨店など農場と田舎町の関係 3. 季節の収穫 a. スケート、そり、雪遊び、b. 教室のペットの世話、c.教室の植物の世話、d.聖バレンタインの日を祝う
	4月 ～ 6月	1. 都市のコミュニティのニーズ a. 地域の健康と安全のための準備：交通規制、街路清掃、消防署など、b.公園や公営運動場、c.公立図書館（子どもたちが読書にある程度のスキルを持っているこの時期には、彼らの興味を引く） 2. 季節の収穫 a.家庭と学校におけるガーデニング、b.野鳥観察のための遠足、c.おもちゃを使った外遊び、d.イースターとメイデーの理解、e.学校の春祭りへの参加

(出典；S. C. Parker & A. Temple(1925), Unified Kindergarten and First-Grade Teaching, pp.178-180 をもとに筆者作成)

community)として、それぞれの場における仕事について体感する。シカゴ大学附属実験室学校に通う園児・児童は都市生活をしているため、都市の生活から農村の生活へと視野を広げるには教師の導きが必要となり、これが小学校第1学年での「農園での生活」(Life of the farm)である。ここでは生産物が市場の商品となるプロセスを学ぶことを通して、自分たちになじみある都市生活と未知の農村生活とを結びつけることが企図されている。

子どもにとって身近な環境からそれを取りまく大きな環境へと学習範囲を拡げていくことは、生活科の学習プログラムとして今日のわが国の小学校カリキュラムの中でも見られるが、テンプレのカリキュラムの特徴としては、子どもにとって身近な環境からの学びを幼稚園の遊びを通した学習プログラムに時系列的に連結させた点にある。こうした彼女のカリキュラム・デザインには、教育と成長を等置し、子どもによる経験の再構成として捉える、シカゴ大学で彼女に教育実験の場を残したデューイの教育観の影響が看取できる。

おわりに—本研究の成果と残された課題

以上、本稿ではこれまでのアメリカ幼稚園運動史研究の中で、検討されてこなかったアリス・テンプレの幼稚園教育思想について、幼稚園と小学校第1学年の統一カリキュラム開発に焦点を当てて考察してきた。これまでに明らかにできた点をまとめると以下の通りである。

第一に、テンプレのシカゴ大学附属実験室学校における幼稚園と小学校第1学年の統一カリキュラムは、国際幼稚園連盟における「幼稚園カリキュラム」作成の延長線上にあり、開発の出発は、幼稚園教育の独自性がアメリカ教育界に広く知れ渡り幼稚園と小学校相互の影響関係が認められるようになったという土壌のもとで、児童研究運動と新心理学を背景に、個々の子どもの精神発達という点から施設を跨いで教育理論および実践について考案する可能性が拓かれたことにある。

第二に、彼女の幼稚園と小学校第1学年の接続カリキュラムにおいては、領域ごとに内容が、「社会的要求」と「子どもの成熟度」という二つの原則により整理されていたこと。そして、テンプレに特徴的であったのが、「社会的要求」を固定的ではなく、歴史的、地域的、個々の子どもによって可変的

であると捉えた点である。

第三に、同カリキュラムにおいて、幼稚園と小学校第1学年の教育内容の共有化とともに、「社会生活の研究」を軸に、子どもたちの経験に即して教育内容の系統的配列がなされていたことである。

このうち第二と第三については、デューイの教育実践理論の影響が色濃く反映されており、デューイの設立したシカゴ大学附属実験室学校の物理的人的環境を、幼稚園教育実践家として継承するという幸運にテンプレが恵まれた結果ともいえる。このことに関連して、本稿では、テンプレの幼稚園と小学校第1学年の統一カリキュラムに焦点を当てた考察に終始したため、幼児教育の実践理論に関して、テンプレとデューイとの比較考察が今後の課題として残された。機会を改めて、論考することとしたい。

注及び引用文献

- 1) 20世紀初頭に国際幼稚園連盟内部で、フレール主義保守派と進歩主義改革派の論争が激化し、連盟では論争の調停を図るべく委員会が設置され、1910年に『幼稚園—幼稚園の理論と実践に関する19人委員会の報告—』(*The Kindergarten: Reports of the Committee of Nineteen on the Theory and Practice of the Kindergarten*) がまとめられたが、結果的には、保守派と進歩派との溝は埋まらず、プロウが保守派の報告書、ヒルが進歩派の報告書を別々にまとめるという形で提出された。こうした経緯で、保守派プロウ対進歩派ヒルという対立図式が先行研究において定着している。(この見解をとる先行研究としては、例えば次の文献があげられる。Beatty, B. (1995), *Preschool Education in America; The Culture of Young Children from the Colonial Era to the Present*, New Haven, Yale University Press)
- 2) アリス・テンプレに関する先行研究については、テンプレ単体として扱ったものは今のところ存在しない。その理由としてテンプレ個人の情報で残されたものが過少であることによる。彼女の自伝はもちろん、書簡、ノート、日記も残っていないため彼女の伝記も存在しない。アメリカ幼稚園教育史研究の代表的書籍であるバンデウォーカー (Nina C. Vandewalker) の『アメリカ幼稚園発達史』(*The kindergarten in American education*) は、初版が1908年で、テン

プルがシカゴ大学着任以前ということもあり、彼女の名前は一度も登場しない (Vandewalker, N. C. (1908), *The Kindergarten in American Education*, New York, Macmillan)。スナイダー (Agness Snyder) の『幼児教育における勇敢な女性 1856-1931』(*Dauntless Women in Childhood Education, 1856-1931*) では、「第Ⅱ部 変化と挑戦」の中で扱われている幼稚園教育改革期における四人の実践家の筆頭としてテンプルは扱われているが、ヒルの「コンダクト・カリキュラム」に比して、彼女の考案したカリキュラムについては断片的に触れられているのみである (Snyder, A. (1972), *Dauntless Women in Childhood Education, 1856-1931*, Wahington, D.C., Association for Childhood Education International)。シャピロ、ビーティ (Barbara Beatty)、アレン (Ann Taylor Allen) によっては、ブライアン、ヒルとともに名前が並記されるのみである (Shapiro, M. S. (1983), *Child's Garden: The Kindergarten Movement from Froebel to Dewey*, The Pennsylvania State University Press. Beatty, B. (1995), *Preschool Education in America; The Culture of Young Children from the Colonial Era to the Present*. Allen, A. T. (2017), *The Transatlantic Kindergarten; Education and Women's Movements in Germany and the United States*, New York, Oxford University Press)。

最近の幼児教育史研究においては、ラスカライド (Lascarides, V. C.) とハイニッツ (Hinitz, B. F.) の『幼児教育の歴史』(*History of Early Childhood Education*) やモーガン (Morgan, H.) の『幼児教育—歴史・理論および実践』(*Early Childhood Education: History, Theory, and Practice*)、日本においては橋本の「アメリカ幼稚園運動における進歩主義の幼小連携カリキュラム」の中でテンプルについての言及がなされているが、テンプルのカリキュラムの具体的に検証することを目的とした研究ではない。(Lascarides, V. C. & Hinitz, B. F. (2000), *History of Early Childhood Education*, London, Routledge/ Morgan, H. (2011), *Early Childhood Education: History, Theory, and Practice*, Lanham, Maryland, Rowman & Littlefield/ 橋本美保 (2008)「アメリカ幼稚園運動における進歩主義の幼小連携カリキュラム—その理論的背景と日

本に伝えられた実践情報—」『アメリカ教育学会紀要』第19号, pp.51-64)

- 3) わが国に限定すると、「コンダクト・カリキュラム」をいち早く研究対象としたのは、倉橋惣三である。彼は『幼稚園真諦』(1834)の中で、児童中心主義の幼児教育実践理論として高く評価した(倉橋惣三『幼稚園真諦(倉橋惣三文庫)』、フレーベル館、2008年)。最近では、1989年学習指導要領における「生活科」新設を受けて、橋川が唯一テンプルの幼小統合授業論を取り上げ、幼稚園・小学校低学年における一貫継続した子どもたちの全人的な自立と発達を促進するための教育原理と方法を明らかにしている(橋川喜美代(1991)「幼稚園・小学校教育の統合—A・テンプルの統合教授論より」『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』第6巻, pp.305-324)。
- 4) Snyder, A., *Dauntless Women in Childhood Education, 1856-1931*, pp.190-195.
- 5) この小委員会は次のメンバーで構成された。すなわち、アリス・テンプル(委員長)、ジュリア・A・アボット、ルイス・アドラー、エリザベス・ハリスン、アンナ・H・リッテル、グレイス・E・ミックス、ルエラ・A・パーマーの七名である。
- 6) IKU (1919), "The Kindergarten Curriculum," in *U.S. Bureau of Education, Bulletin, No.16*, p.5.
- 7) *Ibid.*, pp.11-21.
- 8) *Ibid.*, p.5.
- 9) Temple, A. (1917), *Supplementary Educational Monographs published in conjunction with the School Review and the Elementary School Journal vol.1 No.6, September, 1917, Whole No.6. Survey of the Kindergartens of Richmond, Indiana. Chicago, Illinois, The University of Chicago Press*, pp.23-26.
- 10) Temple, A., *The Kindergarten-Primary Unit-Part 1, The Elementary School Journal, Vol.20, No.7 (March 1920)*, The University of Chicago Press, pp.498-509.
- 11) Dewey, J. (1966), *Lectures in the Philosophy of Education (1899)*, edited and with an Introduction by Reginald D. Archambault, New York, Random House, pp.161-162.
- 12) Press. Beatty, B. (1995), *Preschool Education in America; The Culture of Young Children from the Colonial Era to the Present*, pp.119-131.

- 13) Dewey, J., *Lectures in the Philosophy of Education* (1899), pp.161-163.
- 14) Vandewalker, Nina C., *The Kindergarten in American Education*, pp.209-231.
- 15) テンプルとパーカーとの間の本書の執筆箇所についての記録はないが、彼女が教室における実際の活動を行っていたことから、実践に関する説明資料は彼女によるものであると考えられる。
- 16) Parker, S.C. & Temple (1925), A., *Unified Kindergarten and First-Grade Teaching*, Boston, Ginn & Co., p.1.
- 17) パーカーとテンプレルの『幼稚園と一年生の統一教育』では、ターマンの『学童の知性』(Intelligence of School Children) が取り上げられ、112人の幼稚園児と149人の1年生の児童を被験者として知能テストを実施した結果、前者の精神年齢は3歳からほぼ8歳の範囲であるのに対して、後者の精神年齢は3歳から9歳半以上の範囲であったことから、幼稚園児と1年生との精神年齢の重複の例証が示されたとされている。(Ibid., pp.22-25.)
 なお、この前提については、ターマン以前にホルの『入学時の児童精神の内容』(Contents of Children's Minds on Entering School) において示唆されていた。(Snyder, A., *Dauntless Women in Childhood Education, 1856-1931*, p180.)
- 18) Parker, S.C. & Temple (1925), A., *Unified Kindergarten and First-Grade Teaching*, pp.46-50.
- 19) *Ibid.*, pp.51-60.
- 20) *Ibid.*, pp.178-180.
- 21) *Ibid.*, pp.125-1188.

【付記】本稿はJSPS科研費(19K14116)の助成を受けた研究の成果の一部である。

Alice Temple's Kindergarten Educational Ideas; An Attempt to make the Unified Kindergarten and First-Grade Curriculum in the American Progressive Education Era

TAKASHI YAMAMOTO *

**Okayama Prefectural University*

Abstract : Alice Temple (1871-1946) was the driving force for the Latter half of the American kindergarten movement in the late 19th and early 20th Centuries. Based at the University of Chicago, she was involved in kindergarten education and teacher training. Building on Dewey's theory of practice, she argued that content for the kindergarten curriculum must be drawn from the life experiences of young children, that it should be developed for their benefit.

The purpose of article is to elucidate the educational theory and practice of Alice Temple. Focusing on the integrated kindergarten curriculum she developed as a practitioner at the University of Chicago, the principles of a unified kindergarten and elementary school curriculum during the progressive era is explained, paying particular attention to curriculum scope and sequence.

Keywords : Alice Temple, the American Kindergarten Movement, Kindergarten Curriculum, Unified Kindergarten and First-Grade Teaching, International Kindergarten Union